

2001 【特集】二一世紀の宗教

対談●ポストモダン社会と仏教●星野英紀×大村英昭 / ●現代宗教と女性●野村文子×川橋範子 エッセイ●上田賢治 / ●日本平也 インタビュー●日本のペンテコステ運動…山崎代馬師に聞く 論文●地域に根ざした宗教は可能か?●島藤進 / ●宗教・宗教性・霊性●伊藤雅之 / ●チベットの活仏と中国の宗教政策●広池真一 / ●ユダヤ教と原理主義の未来●臼杵陽 / ●新世紀の宗教●手戸聖伸 / ●仏教教団と葬祭儀礼●佐々木宏幹 / ●宗教における暴力と平和●堀江宗正 / ●イギリスの新宗教と社会●稲場圭信 / ●統計に現れた日本人の宗教性の現実●石井研士 / ●宗教運動への研究視座●大谷栄一 / ●2000年の宗教動向〈国内〉前川理子〈海外〉井上まどか

2002 【特集】宗教・スピリチュアリティ・暴力

対談●日本人の霊性と現代●鎌田東二×町田宗鳳 / ●越境を生きる●金 櫻×黒木雅子 エッセイ●山折哲雄 / ●田丸徳善 インタビュー●『地球交響曲』と霊性…藤村仁監督に聞く 論文●宗教と暴力●芦田徹郎 / ●現代イスラームと女性●塩尻和子 / ●『イスラームの共存』の可能性と限界●池内恵 / ●アメリカン・ナショナリズムと宗教●立田由起江 / ●慰霊と暴力●西村明 / ●現代フランスのスピリチュアリティ●榎尾直樹 / ●現代沖縄にみる霊性●佐藤仕広 / ●スピリチュアル・ケアと宗教●薄井篤子 / ●神社神道と社会福祉●櫻井治男 / ●警戒される「宗教」と維持される「宗教性」●井上順孝 / ●丸山真男と宗教史●遠藤潤 / ●現代宗教社会学の論争についてのノート●小池靖 / ●2001年の宗教動向〈国内〉前川理子〈海外〉井上まどか

2003 【特集】宗教・いのち・医療

対談●生命倫理の最前線●波平恵美子×柘植あづみ×小松加代子 / ●宗教と生命倫理●ホアン・マシア×伊藤道哉 エッセイ●村上陽一郎 論文●いのちの始まりをめぐる欲望と倫理と宗教●橋島次郎 / ●二つの「いのち」という戦術と陥穽●池澤優 / ●現代の医療とスピリチュアリティ●安藤泰至 / ●人工生殖時代の朝鮮儒教●測上恭子 / ●現代社会における胎児の生命観●星野智子 / ●臓器移植と現代の神話●渡辺和子 / ●「生きる力」のユートピア●山中弘 / ●現代医療における「心」と宗教●石川都 / ●病院のチャプレンとスピリチュアリティ●古澤有峰 / ●2002年の宗教動向〈国内〉前川理子〈海外〉井上まどか

2004 【特集】死の現在

対談●現代人と死●五木寛之×田口ランディ / ●墓の語る〈現代の死〉●鈴木若弓×井上治代 エッセイ●松本滋 / ●西谷修 論文●死の現状●カル・ベッカー / ●スピリチュアル・ケアの可能性●沖永隆子 / ●学校教育における「死」●岩田文昭 / ●葬送習俗の変化●新谷尚紀 / ●行き場を失った就飯●関沢まゆみ / ●揺らぎ始めたのか葬祭●菅原壽清 / ●生をはさむ二つの死●八木久美子 / ●2003年の宗教動向〈国内〉辻村志のぶ〈海外〉井上まどか

2005 【特集】宗教復興の潮流

対談●宗教復興と一神教●山内昌之×森孝一 / ●仏教復興は可能か?●瀬戸内寂聴×上田紀行 エッセイ●星野英紀 / ●渡邊實陽 論文●宗教化する政治・政治化する宗教●中野毅 / ●宗教復興と世俗的近代●近藤光博 / ●ポーランドにおける社会主義政権の「終焉」のはじまり●加藤久子 / ●カトリック世界における「宗教復興」●藤原久仁子 / ●イスラーム復興のはざまで●若崎典紀 / ●閉じる聖地、開く聖地●薄井篤子 / ●昭和初期日本の仏教ブーム●大谷栄一 / ●韓国仏教の歴史と現況●延基榮 (尹龍澤訳) / ●現代世界における巡礼の興隆●イアン・リーダー / ●2004年の宗教動向〈国内〉辻村志のぶ〈海外〉井上まどか

特集 慰霊と追悼

「戦後」台湾における慰霊と追悼の課題
——日本との関連について

はじめに

台湾という島は九州ほどの面積だが、多民族より構成される民主国家である。とりわけここ二〇年で急激な民主化が進むに連れ、大きく分けて四つの民族・文化集団に集約し得るという社会的コンセンサスが形成されつつある。第一に、台湾では「原住民族」と称するオーストロネシア系の言語を用いる先住民諸族、次に客家語を用いる客家人、閩南語を用いる鶴佬(福佬)人、そして戦後になって中国大陸の各地から移入してきた、一般に外省人といわれる北京語を主に用いるグループである。

その中でも原住民諸族および客家人に対しては文化の

黄 智慧

こう ちえ

衰退に瀕しているという危機感から、近年、国家によって保護および文化振興の措置が採られてきた。二〇〇五年には民族言語による教育システムが完備されたうえ、それぞれ専属のテレビチャンネルが登場し、民族言語による番組を終日放送するようになった。一方で鶴佬人は人数的に最も多いマジョリティではあるが、文化政策で長く抑圧されてきたため、民主化のもとでその憂さを晴らすように「台語」を堂々と誇るようになった。以上三者のいずれもが競って民族への帰属意識を高揚させ、積極的に地域活性化にも取り組んでいる。

こういった活発な民族文化の復権運動は、戦後長く文化・教育政策の主導権を握ってきた外省人の抱く中華文

化と微妙な競争関係にある。現に台湾社会はいま、各民族集団の共存・共栄の道を模索している状況にある。

そのため、台湾社会における慰霊と追悼を考える際、一言で表現するのはほとんど不可能である。「慰霊と追悼」というテーマは、宗教の次元で語られるのが一般的であるが、それぞれの民族集団の精神文化の根底に直接触れるものでもある。同時に、政治的現実と絡んでくるという点においても、宗教の次元を超えている。台湾における「慰霊と追悼」というテーマは、まさに民族、宗教、政治の三つの領域の行き交うところにあるいえる。もともと台湾は国教を持っておらず、厳しい政教分離政策も取っていない。それどころか議員や政治家が公務中に宗教的な場に登場し、信者ではなくても、儀式に参加することがある。今までの総統の中で、特に李登輝が個人的には敬虔なクリスチャンであるが、他の宗教に対して非常に寛容であった。例えば戒厳令時代に邪教という汚名を着せられた一貫道やいくつかのキリスト教系新興教団は再び日の目を見るようになった。そして今の陳水扁総統は鶴佬系の出身であり、その民族の宗教的寛容



写真1 客家人の信仰の中心である新竹新埔・褒忠義民廟

さに染まっている。しかしこうした宗教的に寛容な社会的雰囲気の中で、国として処理できない慰霊と追悼の課題が未だに厳然と残っている。

拙論では、まず原住民および客家人、鶴佬人の慰霊と追悼の観念について考察し、さらに国の慰霊・追悼の関連施設について検討を加え、最後に太平洋戦争の慰霊と追悼という課題に焦点を絞りたい。そうした検討作業をするうちに、日本とこの課題との関わりがいかにか錯綜しているかがおのずと浮かび上がってくるであろう。

一、原住民諸族の祖霊信仰

台湾の原住民は現在総人口約四六万人、元来九つの民族が政府により認定されていたが、二一世紀に入ってから認定された民族の数は一二に増えた。とは言っても、実際、各民族はサブグループにまた更に分けられ、言語だけでも四〇種類に細分化されている。そして国から認定を得ようと努力中のエスニシティも存在する。それだけ、彼らは昔から自給自足の部族社会において実に多種多様な文化様式を築き上げてきたと言える。その宗

教生活は概して言えば、神や祖霊を畏れ崇めるアニミズム的観念のもと、祖霊祭祀と農耕儀式を行うことである。そして、社会秩序を維持する掟として禁忌を重んじている。二〇世紀の後半からキリスト教が急速に普及し始めたが、地域や部族間の差もあり、伝統的な宗教観念は依然として根強く人々の心に残っている。また、近年、民族の復権運動とともに、衰えていた祭が復活されるなど、伝統的な宗教観念も見直されている。

ここでは一二民族の中から例として三民族を取りあげてみたい。まずは台湾北部と中部の山間地に住む人口約九万五〇〇〇人のタイヤル族の事例から考えていきたい。

(一) タイヤル族

タイヤル族の宗教的観念を語る上で、最も重要なのは「オットフ」(uthuk)という概念である。神、祖先、死者の霊をどれも「オットフ」と呼ぶことができ、人体の一部である瞳孔、あるいは全身の動脈、さらには影に至るまで「オットフ」と言う。人間は霊魂と肉体から成り立っていると考えられており、死亡した時、霊魂は腐りゆ